

中国仏教研究の動向と課題

木村清孝

はじめに

筆者は、1988年、中国および東アジアの仏教に関する研究の状況について報告し、その問題点と見通しについて論じた¹⁾。本論は、その延長線上において、筆者の目から見た現在の中国仏教研究の動向と、取り組むべき課題について考察しようとするものである。

ところで、本論の主題に関連して、最近注目される発表が相次いでなされた。その第一は、吉津宜英氏の「中国仏教研究の一動向－「批判的研究」について－」²⁾である。氏はこの報告の中で、伊藤隆寿氏や松本史朗氏によって遂行された中国仏教のいわゆる「批判的研究」(後述)の問題点を独自の視点から洗い出し、部分的には共感を示しながらもかなり厳しい批判を展開された。次に、福井文雅氏は、「日本の道教研究史の回顧と問題点」³⁾において日本の道教研究史を整理され、とくに第二次大戦後における研究の特色と現今の課題を明らかにされた。その所論には、例えば「道教を視野に入れない中国仏教研究も万全ではない」といった主張からも推測できるように、中国仏教研究者が考えるべき問題の指摘も多い。さらに、先般日本を訪れたバーナード・フォール(B. Faure)氏は、「禪研究一方法論的諸問題一」と題する東京大学での講演⁴⁾において、アメリカにおける禪研究が構造主義的アプローチなどさまざまな新しい方向を模索し、現に成果を出しつつあることを報告された。その中で氏は、上記の「批判的研究」については、「正統仏教への新たな意志の表明」(The assertion of a new will to orthodoxy)として批判しておられた。以下にも若干言及するが、筆者自身もこれらの諸研究を通して主題に関する思索を深めることができた。合わせて参照していただければ幸いである。

1. 研究の基盤

まず、中国仏教の研究の基盤がどういう面で、またどの程度整ってきているか

について見てみよう。

筆者は、冒頭に触れた小論の中で、一つの課題として「基本的資料と参考文献類の一層の整備・充実が進められるべきである」と述べた。しかし、思うに、この点は現在、相当に改善されてきている。

第一に、基本資料に関しては、これまで知られなかった資料や知られていても手に入れることが難しかった資料が続々と公にされている。例えば、「敦煌宝蔵」は一応の完結を見たし、「中華大蔵経」はかなり刊行が進んでいる。日本では、「七寺古逸経典叢書」の公刊も開始された。これらによって、従来のようにもっぱら大正新編大蔵経に依存するだけでは十分な研究はできないことが、誰の目にも明らかになりつつあるのである。

第二に、実証的な文献研究に不可欠の索引類の充実も著しい。『法華経一字索引』『五教章一字索引』『碧巖録索引』をはじめ、枚挙にいとまがないほどである。

第三に、特定の研究の位置づけをするために必要な概説書も、ほぼ整えられた。その集成書ともいべき鎌田茂雄『中国仏教史』、任継愈主編『中国仏教史』の刊行も峠を越えつつある。

これらに加え、第四に、学界におけるコンピューター利用のいち早い導入と普及は、膨大なテキストの語彙の検索や関係論文の調査を容易なものにしてきている。日本印度学仏教学会のテキストデータベース作成検討委員会の調査によれば、1995年5月現在で、会員諸氏によって入力されている漢訳仏典・漢文仏教文献は、すでに50を超えたという⁹⁾。このような動きは、研究基盤の確立と研究の促進に大きく貢献するものとなろう。

2. 研究の現状と動向

では、上述した研究基盤の整備を承けて、中国仏教研究はいよいよ盛んになっているであろうか。残念ながら現状はそうではない。このことを端的に映し出すと考えられるものに、内外の学会等における発表論文数がある。まず、本学会の過去三年間の学会誌掲載論文の数を調べてみると、関係論文は92年度は233篇中28篇、93年度は187篇中31篇、94年度は217篇中22篇である。その全体に占める割合は、平均で13%、94年度だけ見ると、約10%である。ちなみに、発表が2年に1度に制限されていた86・87年度を合わせてその数を出してみると、関係論文数は401篇中58篇、約14.5%である。これらのうち、例えば上の13%という数字を多いとみるか、少ないとみるか、あるいは適当と見るかは、人によって異なる

う。しかし、ここ数年の傾向として、インド学仏教学研究に占める中国仏教研究の比重が小さくなりつつあることは、この調査から明らかであろう。このことは、東方学会が毎年刊行している英文の『東方学関係書書論文目録』(Books and Articles on Oriental Subjects)の調査によってもほぼ確かめられる⁶⁾。

次に、最近国際的な動向をうかがわせる一つの指標として、例えば94年10月にメキシコシティで開かれた第11回国際仏教学会学術会議(11th Congress of the International Association of Buddhist Studies)における関係論文の発表数がある。この学会は、もともとさほど大きな組織ではなく、また仏教研究者の少ないメキシコでの開催ということもあって、登録参加者数は80余名であったが、合計74篇の研究論文発表(Addressを除く)が予定された。しかし、その大半はインド仏教チベット仏教に関わるものであり、中国仏教関係の論文は、そのうちわずか5篇にすぎなかった。率にすれば、7%弱である。しかもその中には、内容的にどうかと思われるものも含まれていた。このことだけから断定することは危険であるが、国際的に見た場合、中国仏教研究にはまだ質量ともに問題があり、そのことが仏教学全体の水準を必ずしも高めていかない要因の一つになっているのではないかというのが、率直な感想であった。

このように、総体として見れば、中国仏教研究は内外ともに下降気味に映る。けれども、近年公刊された個々の成果を拾い上げてみると、注目すべきものも少なくないことに気づかされる。とくに、国内でそうである。試みに、90年以後の主要な著書を卑見の及ぶ範囲で次に例挙してみよう。

- a. 上山大峻：敦煌仏教の研究(1990, 法蔵館)
- b. 諸戸立雄：中国仏教制度史の研究(1990, 平河出版社)
- c. 鎌田茂雄：中国仏教史(1990・1994, 東京大学出版会)
- d. 吉津宜英：華嚴一乗思想の研究(1991, 大東出版社)
- e. 伊藤隆寿：中国仏教の批判的研究(1992, 大蔵出版)
- f. 木村清孝：中国華嚴思想史(1992, 平楽寺書店)
- g. 椎名宏雄：宋元版禅籍の研究(1993, 大東出版社)
- h. 小林正美：六朝仏教思想の研究(1993, 創文社)
- i. 松本史朗：禅思想の批判的研究(1993, 大蔵出版)
- j. 牧田諦亮(監)・落合俊典(編)：七寺古逸經典叢書(全6巻, 1994～, 大東出版社)
- k. 菅野博史：中国法華思想の研究(1994, 春秋社)

1. 高崎直道・木村清孝（編）：シリーズ・東アジア仏教（全5巻・別巻1，1995～，春秋社）

思うに、これらのものは、それぞれに貴重な成果を挙げている。すなわち、aは敦煌の仏教の独自性を明らかにするとともに、敦煌文献の扱い方に注意を喚起した。bはこれまであまり研究の進んでいない中国仏教の社会的側面を解明した。cは中国仏教史を俯瞰するための有力な手だてを提供しつつある。dは華嚴教学の大成者法蔵の思想に関する初めての本格的な研究である。eは、iとともに、従来の無自覚的な研究に鋭い批判の矢を放った。fは中国華嚴思想の流れを跡付け、そのエッセンスを明解に提示した。gは禅研究の基礎をなすべき版本の優れた研究である。hは六朝仏教の儒道二教との深い関係を明確にした。jは新資料を公にし、東アジア仏教の再検討を迫りつつある。kは吉蔵を中心に法華思想の教の関連性形成の一面を克明に示した。lは「東アジア」という枠組みの中で、諸地域の仏と独自性を浮き彫りにしようと試みている。この事実は、日本における中国仏教研究の地力はまださほど衰えておらず、分野によっては着実に成果を積み重ねてきていること、また、新たな研究の胎動さえ聞こえつつあることを示しているように思われる。

3. 研究上の問題点と課題

上述したところから、中国仏教の研究者数の減少、ないし研究意欲の後退を示唆する研究論文数の下降傾向は、さほど心配には及ばないという見方も出てこよう。しかし、上に触れたいわゆる「批判的研究」のとくに学生や若手研究者への影響の大きさを考えると、それは見過ごしにはできまい。確かに「批判的研究」に属する諸研究は、例えば中国仏教の場合、「道」や「理」といった中国の伝統的思惟と深く結びついて展開していることに無頓着に、またみずからの研究方法を自覚せず、インド仏教の延長線上で、もしくは日本仏教の源として安易に研究を進めてきたものに対する警鐘となった。また広く、「仏教とは何か」を主体的に問うことの重要性を再認識させた。だが、それらは、概して「批判的」というよりはむしろ「神学的」(theological)な色彩を帯び、「正統仏教」を新しく立てる結果を招いている⁷⁾。また、「批判的研究」の推進者たちは、文献学的研究にせよ、思想史的研究にせよ、「価値自由」(Wertfrei)たらんとする真の客観的・実証的研究⁸⁾に対しては、それが余儀なくされる苦闘とその意義を十分に理解していないようにも思われる。しかし、そのような問題点を内包するにもかかわらず、

「批判的研究」は、とくに中国仏教研究の分野において、若手研究者の研究への意欲をそいできた節がある。いまわれわれは、新たな地平へ向かって研究を再構築していくべき時を迎えているといえるのではなからうか。

では、さしあたってどういう点を心がける必要があるだろうか。

思うに、その第一は、従来の研究の欠陥や弱点を再検討することである。例えば、無自覚的な宗学的アプローチなどは、強く反省されるべきであろう。また、これまで概して細かなところだけに目を向けがちであった姿勢を改め、大きな視座に立って対象とする問題の性格をしっかりと見極めることも大切であろう。

第二には、中国仏教研究のほんとうの「面白さ」を発見し、発見した上はそれを宣揚することである。ただし中国仏教は、人間にとって安らぎ、ないし救いとは何かという、宗教の本質を探る絶好の場である。なぜならそれは、広義の宗教の次元において、インドと中国との間の激しい文化摩擦の末に生じた結晶体ともいえるものだからである。それだけに、少し踏み込んでみれば、これほど興味・関心を惹く分野は多くないと思われる。その面白さを見出し、それを広く伝えていくことが、中国仏教研究を充実させ、発展させる大きな力になるであろう。

第三は、従来ややもすれば陥りがちであった漠然とした研究の仕方を改め、研究対象と研究方法をはっきりと自覚し、明確化することである。これは、いうまでもなく研究者個々に委ねられた問題であり、個々人の責任において遂行されるべき問題である。しかし、その研究方法に関して参考までに筆者の基本的な区別の仕方をいえば、次のようになる。すなわち、中国仏教の研究は大きく、文献学的研究、思想史的研究、哲学的研究、宗教社会学的研究の五つに分かれる。いずれにも、厳密な批判的態度が求められることはいうまでもないが、研究者はまず、みずからの研究がそれらのどれに当たるかを検証してみることもよいのではなからうか。なお、このうち筆者がよるものは、主に思想史的研究であり、これには正確な歴史学的知識の修得が前提となる。

第四は、海外の研究者や研究団体と積極的に交流をはかることである。それによって、一方では我々自身がさまざまな刺激を受け、新知識を得ることができる。とくにアメリカの人文・社会研究は、よくも悪くも時代の動きを敏感に反映するから、アメリカの研究者らと交わり、そこで開かれる学会に参加することは有意義であろう。しかし、そうした交流を単に受け身の姿勢で進めるだけでは不十分である。むしろ、こちらが発信基地となって、情報や研究成果を積極的に海外へ送り出さなければならない。まに実際、それに値するものも少なくない。そのこ

とは、前節に例示した諸著作だけでも推察されよう。

結 び

中国仏教研究は、現在そのあり方を問い直され、再構築を求められている。思うに、その再構築の道を歩むことは決して楽ではなからう。しかし、その道がどういう道かはすでにほぼ明らかである。それは、宗教研究の真の楽しみをたえた明るい道である。意欲ある多くの人々とともにこの道をしっかりと歩いていくこと、それが筆者のいまの強い願いである。

- 1) 「中国仏教研究の現状と課題－華嚴思想を中心として－」（『中国－社会と文化』3, 1988. 6.）。これを踏まえ、さらに視野を広げて随想風に纏めたものに、「東アジア仏教研究の過去・現在・未来」（『春秋』303, 1988. 11.）がある。
- 2) 1994年度の仏教思想学会における発表に基づくもの。『仏教学』36（1994. 12.）所収。
- 3) 『町田三郎教授退官記念 中国思想史論叢』（1995. 3.）所収。
- 4) 原題は“*Chan/Zen Studies: Some Methodological Issues*”。1995年5月に行われたものである。
- 5) 1995年6月9日に開かれた同委員会の配布資料〈入力文献リスト〉による。
- 6) 同目録における過去3年間の収録論文数を調べたところ、中国仏教関係は、91年度156篇、92年度130篇、93年度139篇であり、93年度では全体の約4%を占めていた。同目録の収録論文数は、年によって必ずしも一定しないから、単純な比較や統計化はできないが、やや減少傾向にあるように見える。
- 7) P.N. Gregory, *Tsung-mi and the Problem of Hongaku-shiso*（『駒沢大学禅研究所年報』5, 1994. 3.）および、注記（4）記載の フォール氏の講演の梗概を参照。
- 8) 「価値自由」（Wertfrei）の理念は、マックス・ウェーバー（M. Weber）による。ただし、筆者はかれのように、完全に主観性をなくした、純粹に「価値自由」な学問が成り立つと考えているわけではない。けれども、むしろそのことを認識し、不断に問題の扱い方の不十分さや問題点の見落としへの恐れを抱きながら、研究対象に対して一定の視角と距離を保つべく努めることによって、客観性のある一つの優れた解釈－真実を指し示している可能性をもつが生まれるのではなからうか。そして、そのような解釈の提示こそ、とりわけ人文社会系の学問が目指すべきものではなからうか。

〈キーワード〉 中国仏教研究, 中国仏教の本質, 価値自由

（東京大学教授, 文博）